

# 敬語による国民性と対人コミュニケーションの違い —日・韓・中三国を中心に—

王 少 鋒\*

## The difference between national character and interpersonal communication by honorifics

Shaofeng WANG \*

キーワード：敬語 敬辞 敬語行動 国民性 対人コミュニケーション

### Abstract

In this paper, we analyze the cultural background, national character and the difference of interpersonal communication between Japan, Korea and China by comparing honorific systems in Japanese, Korean and Chinese.

In Japan which has strong social regulations of organizations and groups, honorific standards are decided in principle according to the internal and external relations of the organization, hierarchical relationships, relationship affinity, and the standards of cases, and a relative honorific is used. In the religious society of Korea, the greatest bond in human relations is kinship, and absolute honorific expressions are used with the absolute obedience to parents and elders. In the Chinese society, a strict honorific system is not used. Inside the group, individuals' abilities are emphasized rather than relationships—such as age, senior and junior status—, and equal human relations are formed.

### 1. はじめに

世界の全ての言語に敬意を表わす表現があるように思われるが、それは広義の敬語ともいえるであろう。しかし敬語法による表現、つまり狭義の敬語という観点から見ると、日本語・韓国語・中国語には、次のような特徴がある。日本語の敬語は相対敬語であり、韓国語のそれは絶対敬語であり、中国語には敬語がない。敬語の有無と使用方法の違いは、文化的背景、社会構造、国民性の違いを反映している。

本論では、敬語体系の比較を通して日・韓・中三国の文化的背景や国民性や対人コミュニケーションの違いを明らかにしたい。

---

\* 大阪電気通信大学共通教育機構人間科学教育研究センター准教授

## 2. 日・韓・中三国における敬語体系の違い

日本語と韓国語はともにアルタイ語系 (Altaic languages) に属し、膠着語である。共通の特徴の一つは、尊敬語、謙讓語、丁寧語という3つの動詞の敬語の形を持っていることである。中国語はシナ・チベット語族 (Sino-Tibetan languages) に属し、孤立語であるため、用語の尊敬語・謙讓語・丁寧語の敬語体系は存在しない。

王少鋒(2017.p.191)が下記の表1のように中国語・日本語・韓国語における常用動詞の敬語形式を比較している<sup>1)</sup>。それぞれの敬語の違いを確認しておきたい。

表1 常用動詞の敬語比較例

	動詞原型	尊敬語・존경어 Respectful language	謙讓語・겸양어 Humble language	丁寧語・정중어 Polite language
中日韓	去 行く 가다	いらっしゃる 가십니다	うかがう 가겠습니다	行きます 갑니다
中日韓	来 来る 오다	おいでになる 오십니다	まいる 오겠습니다	来ます 옵니다
中日韓	吃 食べる 먹다	召し上がる 드시십니다	頂く 먹겠습니다	食べます 먹습니다
中日韓	说 言う 말하다	おっしゃる 말하십니다	申す 말하겠습니다	言います 말합니다
中日韓	看 見る 보다	ご覧になる 보십니다	拝見する 보겠습니다	見ます 봅니다
中日韓	做干 する 하다	なさる 하십니다	いたす 하겠습니다	します 합니다

表1のように日本語では「行く」という動詞の尊敬語、謙讓語、丁寧語はそれぞれ「いらっしゃる」「伺う」「行きます」と別の単語を用いて表現しているが、韓国語でもこれと全く同じである。膠着語である日本語と韓国語は、文法的機能を担う敬語専用の助詞・助動詞が発達し、敬語の文法体系が存在する。

一方、中国語では「行く」は「去」となるが、尊敬語、謙讓語、丁寧語はなく、いつでも誰に向かっても表現を変えない。「来る」には、「光临」という尊敬表現があり、「欢迎光临!」はお店で店員さんが客を迎える時に使うフレーズで「いらっしゃいませ」となる。「食べる」には「用」という尊敬表現があり、「请慢用!」は「どうぞ、ごゆっくり召し上がって下さい」となる。これらは尊敬語の役割は果たすが、レストランで接客用語として限定的に使われているもので、誰もが使っている日常会話の表現ではない。

孤立語である中国語は形態論的な文法的手段は発達しておらず、時態、複数、所有格、体などの文法概念がなく、語順と語彙の意味が文を作る上で基本となる。中国語には尊敬の意を表す敬辞と謙讓の謙辞はあるが、敬語の文法システムはない。

日本語と韓国語の敬語は文法上の敬語であるが、中国語の敬語表現には「敬辞」しかない。

## 2.1 日本語の敬語

日本語の敬語はこれまでは「尊敬語、謙讓語、丁寧語」の3種類といわれてきた(辻村敏樹. 1991.p.7)<sup>2)</sup>。しかし、2005年3月30日に文部科学大臣から文化審議会に対して、「敬語に関する具体的な指針の作成について」という諮問がされ、文化審議会国語分科会は約2年間にわたる検討を経て、2007年2月2日に「敬語の指針」をまとめ、日本語の敬語を下記表2のように更に細分化して5種類とする答申をまとめた<sup>3)</sup>。

表2 敬語の最新分新分類

5種類		3種類
尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型 相手側又は第三者の行為・ものごと・状態などについて、その人物を立てて述べるもの。	尊敬語
謙讓語 I	「伺う・申し上げる」型 自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの。	謙讓語
謙讓語 II (丁重語)	「参る・申す」型 自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁重に述べるもの。	
丁寧語	「です・ます」型 話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの。	丁寧語
美化語	「お酒・お料理」型 ものごとを、美化して述べるもの。	

参考：文化審議会答申『敬語の指針』(平成19年2月2日)

表2のように、日本語の敬語は右側の従来の3種類から左側の「尊敬語」、「謙讓語」、「丁重語」、「丁寧語」、「美化語」の5種類になった。

更に、浦谷宏(2010)は日本語の敬語を直接尊重語、恩恵直接尊重語、相手尊重語、間接尊重語、恩恵間接尊重語、丁重語、自己卑下語、尊重丁重語、美化語、丁寧文体語、丁重文体語の11分類とした。<sup>4)</sup>

なぜ日本語がこのようにより複雑な敬語体系になったのかについてはその文化的背景があり、国民性とも大いに関係していると思われる。

日本語では、集団主義社会において、属する集団の利益を最も重要視をするため、内外関係を重視する相対敬語が使用される。日本語でコミュニケーションする際は、常に相手の年齢や地位を意識し、相手との関係や距離を測らなければならない。

日本語における敬語は相対敬語である。つまり話し手と話題になっている人物との関係、または聞き手と話題になっている人物との関係などによって、その使い方が変わる。すなわち、相対敬語社会はタテ関係よりはヨコ関係を重視していることになる。

日本人の言語コミュニケーションについて外から客観的な目で観察すると、面白い点が幾つか浮かび上がってくる。日本人は言葉を話す際には、常に上下関係、親疎関係、内外関係を意識して、尊敬語、謙讓語、丁寧語、ぞんざい語のいずれかの表現を選択する。つまり、相手との心的距離を、ことば使いの差で示そうとするのである。

## 2.2 韓国語の敬語

韓国語における敬語は尊敬語・謙讓語・丁寧語の3種類があるが、それぞれの用法は日本語とは基本的に違っている。韓国語の丁寧語は主として相手の身分によって使い方が決まるといった特徴をもっている。この点は日本語の丁寧語とは違う。そして現代韓国語では謙讓語はほとんど使われなくなっている。韓国語においては、敬語を使う主な原則は年齢であり、その次が身分的な地位である。韓国では、人間関係における最大の絆は血縁であり、親や年上に対して、絶対に服従することによって絶対敬語を使用する。絶対敬語の使用が宗族性タテ社会の特徴である。

最後に注目したいのは、韓国語と日本語の敬語において敬語の使い方が根本的に違う点である。それは自分の身内で目上の者、両親や上司などに関することを相手に述べる場合、日本語ならば謙讓語を使用するが、韓国語では尊敬語を使用する。

例えば：

「うちの社長は今日貴社へまいると申しておりました」という日本語の場合は、韓国語では「우리 사장님께서는 오늘 貴社에 가신다고 말씀하셨습니다.」(うちの社長様は、今日貴社へいらっしゃるとおっしゃいました)となる。

「私の父は中国におります」という日本語は、韓国語では「제 아버님은 중국에 계십니다」(私のお父様は中国にいらっしゃいます)となる。

## 2.3 中国語の敬辞体系の盛衰

中国語には用語の尊敬語・謙讓語・丁寧語の体系は存在しないが、中国語の記録が大量に残っている周朝(紀元前11世紀～3世紀)から現代に至り、長い歴史の中で敬辞体系が非常に発達してきた。

『中国語詞格(case)全書』(原書名《汉语词格大全》)に中国語のあらゆる詞格が網羅されているが、その中に敬謙格も収録されている。敬謙格は尊敬詞と謙讓詞との二つに分けられ、敬謙詞は、話し手の相手に対する礼儀や尊敬を表し、言葉の感情を強めるとの記述に留められ、それ以上の論述はないが、戦国、三国、明、現代の4つの異なる時代の文献において敬語が使われた事例を挙げている。

①齊王……封书谢孟尝君曰：“寡人不详，被于宗庙之崇，沉于谄谀之臣，开罪之君。

寡人不足为也，愿君顾先王之宗庙，姑反国统万人乎！”(《战国策・冯谖客孟尝君》)

②愚以为营中之事，悉以咨之，必能使行阵和睦，优劣得所。(诸葛亮《出师表》)

③数千里外，得长者时赐一书，以慰长想，亦即甚幸矣。何至更辱馈遗，则不才盖将何以报焉！书中情意甚殷，即长者之不忘老父，知老父之念长者深也。(宗臣《报刘一文书》)

④惠书早已收到，迟复为歉！遵嘱将记得起来的旧体诗词，连同你们寄来的八首，一共十八首，抄寄如另纸，请加审处。(毛泽东《关于诗的一封信》)

(汪国胜,吴振国,李宇明,1993,p.279)<sup>5)</sup>

上記①の『戦国策』には「寡人」という第一人称の謙讓詞が用いられており、「君」はここでは尊敬詞である。

②の诸葛亮(孔明)が書いた『出师表』では自分のことを「愚」と謙遜詞で表している。

③の明朝が書いた宗臣の『報劉一文书』では、「長者」が尊敬詞であり、「不才」、「老父」は謙讓詞である。

④の毛沢東が書いた《詩に関する手紙》では、相手から貰った本が「惠書」と尊敬詞で表現され、

「遅復為歉」は返信が遅くなり申し訳ないという気持ちを含む謙讓表現である。「遵囑」はご指示に従うという謙讓表現であり、「審処」はご審議下さいという尊敬表現である。

このように戦国時代(BC475～BC221)から近代に至って中国語には豊富な敬辞体系があるが、それではなぜ、現代中国語において敬辞体系が急激に衰退したのであろうか。王少鋒(2000)と彭国躍(2000)がそれぞれの視点から検証を試みている。

王少鋒(2000,p.189)は敬語と儒教思想との関連に着目し、儒教思想の衰退に伴って敬語が衰退したと主張している。<sup>6)</sup>

王少鋒は中国語の敬辞体系に接頭辞が多いことを指摘している。尊敬表現としては貴・尊・令などがあり、具体例として、貴国、貴党、貴社、貴夫人、令夫人、玉体、芳名、御命、貴兄、尊父、賢弟、令室、令息、令兄、令孫などがある。

謙讓的な表現としては家・敝・拙などの接頭辞があり、その例として、家父、家嚴、愚父、愚母、老母、愚妻、愚息、拙女、家兄、舎弟、愚弟、門下、弟子、拙宅、拙作などが挙げられる。

これらの表現を見てみると、すべて人間に関係していて、ほとんどが儒教思想を反映した表現である。中国は儒教の発祥地であり、2500年の歴史において、儒教が中国人の倫理感や価値観を大きく左右してきたが、長い歴史において、儒教が三回ほど大きなダメージを受けたことがある。

一回目は、秦始皇帝の「焚書坑儒」である。秦始皇帝による焚書坑儒は貴重な儒教著書を焼き払い、多くの儒者が生き埋めにされた。

二回目は、五四運動(1916-1921)の「打倒孔家店」である。辛亥革命により、二千年以上続いた中国の皇帝制が倒された。それに代わって孫文に指導された共和制国家・中華民国が成立(1912)したが、その前後、魯迅を代表とする中国近代の知識人たちは、儒教を「人が人を食う」家族制度を支える理論とみなし、さらに皇帝制時代の理論たる儒教については、中国の近代化を妨害するものとして徹底的に攻撃した。日本でもよく知られている魯迅の『狂人日記』はその代表作である。

三回目は1960年代の文化大革命の「批林批孔」運動である。席宣氏の『文化大革命簡史』<sup>7)</sup>によれば、1974年1月18日に毛沢東が「四人組の提案を認め、全国で「批林批孔」運動、すなわち林彪と孔子を批判する運動を一斉におこした。この運動の本当の狙いは、江青に「党内の大儒」と言われた周恩来首相の打倒にあったが、この「批林批孔」運動は、儒教の教えを敵視し、儒教の教典の『論語』を徹底的に批判した。

このように儒教は中国の歴史においては、三回にわたって大きなダメージを受けた。特に近代の中国において、五四運動の「打倒孔家店」と文化大革命期における「批林批孔」運動により、儒教思想が薄れたとされる。その結果、儒教思想が衰退し、敬辞体系も衰退したのではないかと考えられる。

一方、彭国躍(2000,p.193)の実証研究によると、中国語敬語体系の衰退プロセスには下記の三つの段階がある。

1. 繁栄期(14世紀-19世紀末,元明清)
2. 衰退期(20世紀前半, 中华民国)
3. 消滅期(20世紀后期, 中华人民共和国)

中国語の敬辞体系は14世紀から19世紀の繁栄期へ、そして20世紀前半の衰退期を経て20世紀後半の消滅期に入り、体系としての敬辞現象が存在しなくなった。<sup>8)</sup>

伝統的な敬辞表現は社会主義革命によって衰退したと一般的に考えられがちだが、彭国躍の研

究では敬辞の変化は辛亥革命勃発や清王朝崩壊の時から既に始まっており、中華民国の樹立、新文化運動、五四新民主主義などの一連の社会的に大きな変化が当時の社会構造や人間関係や価値観などを変化させ、敬辞の衰退を促した重要な原因ではないと分析している。

彭国躍は壮大な実証研究を行い、近代中国語の敬語の全容を明らかにした。氏の『近代中国語の敬語システム』は近代中国語敬語研究の一里塚だと言っても過言ではない。しかし、彭氏の研究は近代中国語に焦点を絞っているために中国語の繁栄期を14世紀に定めたが、前述のように古代中国語には豊富な敬辞体系があり、儒教の経書の中で特に重要とされる四書五経に敬辞表現が非常に多く見られる。これについては別稿に譲る。いずれにしても現代中国語においては、特に日常会話での敬語が絶滅したのは事実である。

しかし、1980年代から中国で儒教思想の再評価や再認識を提唱する知識人が増えてきており、その先頭に立ったのは著名な哲学者李沢厚氏であった。氏は『中国の文化心理構造』<sup>9)</sup>において孔子の再評価を主張した。その後の20数年間で中国の「儒学復興」現象が段々広がってきている。そのような背景において筆者は、現代中国語の敬語体系の再建の可能性について検証し、現代中国語の敬語体系の再構築を呼びかけた。<sup>10)</sup>

### 3. 日・韓・中三国の国民性の違い

日本語と韓国語は共にアルタイ語系に属する膠着語であり、文法的に非常に類似性の多い言葉であると言われている。敬語においても動詞に尊敬語、謙讓語、丁寧語という3つの形を持っている点で共通しているにも関わらず、それぞれの用法は根本的に異なっている。なぜ敬語の使い方においてこのような大きな差異が生まれたのであろうか。筆者は、その差異はそれぞれの文化的な特質と国民性の違いによるものではないかと考える。

それでは、日・韓・中三国の国民性について考えてみよう。今まで日・韓・中三国の国民性に関する著書や論文は数多く発表されており、日本人の国民性に関する論著は明治から今日まで二千点以上あり、韓国人論や中国人論、日本人と韓国人の比較論、日本人と中国人の比較論などもたくさん見られる。国民性に関する論著の多さはその論述の難しさを物語っている。

外国人による日本人論の代表作とされている『菊と刀——日本文化の型』<sup>11)</sup>は、アメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトが1946年に出版した日本文化論である。著者は日本文化が「恥の文化」であり、日本人は個人主義でなく集団主義であることを指摘した。

日本人の集団主義論について否定的な文献も存在し、高野陽太郎著『「集団主義」という錯覚——日本人論の思い違いとその由来』<sup>12)</sup>がその代表作であろう。

しかし、より多くの論著が日本文化や日本人について論じる時、日本の集団主義的な特徴を指摘し、日本は集団主義であることが通説となっている。

筆者も嘗て日・韓・中三国の国民性のうち他国と異なる特徴をそれぞれ一点にしぼるとすれば「日本が集団主義であり、韓国は宗族主義であり、中国は個人主義であると言えようと思う」と論じた<sup>13)</sup>。

しかし、東アジアの日本・韓国・中国のいずれも集団主義者とみなされることが多く、韓国人は宗族主義であり、中国人は個人主義者であることについて質疑をよく受けた。これに答えるには、まず集団主義者の定義を改めて確認する必要がある。

### 3.1 集団主義の違い

集団主義の定義については、H.G.トリアンディス（2002,p.2）によって「親密に結びついた人々、つまり、自分を一つ以上の集団（家族、仕事仲間、一族、国）の一部と見なし、おもに集団の規範や集団から課された義務に動機づけられ、自分自身の目標よりも集団の目標を優先させ、また集団においてメンバーの団結を重視する人々」と定義され、そして、個人主義は「緩やかに結びついた人々、つまり、自分は集団から独立していると見なし、おもに自分の好み・要求・権利・他者と関係をもつ際にはまずそうすることの利点・欠点を合理的に判断することが重要と考える人々」と定義された<sup>14)</sup>。

この定義から東アジアの日本・韓国・中国のいずれも集団主義者とみなされるが、H.G.トリアンディスは、「純粹に」個人主義または集団主義という社会はない、「すべての国において集団主義的要素と個人主義的要素の両方を、その組み合わせの程度に違いはあっても見いだすことができる」とも指摘した。

そして、H.G.トリアンディスは、しばしば日本を取り上げ、典型的な集団主義の事例として分析したが、中国については、「集団主義の興味深い事例である」、「個人主義的な価値や目標と集団主義的な価値や目標の両面が見いだされた」と日本とは異なる認識を示している。

このように日・韓・中三国は共に集団主義者と一般的に考えられがちだが、三国はそれぞれ集団主義的要素と個人主義的要素の組み合わせの度合いが異なり、日本は最も集団主義的な要素が強く、典型的な集団主義者であると言えよう。中国は集団主義的な要素よりは個人主義的な要素が強く、韓国はその中間程度ではないかと考えられる。

どの国でもその国民は、その国特有の意識や性格を持っている。これらはほとんど無意識に環境の影響を受けて育成される。この環境は自然環境と社会環境の総合である。社会環境とは歴史、宗教、言語、社会構造などによって形成される人間環境であり、自然環境とは風土である。

### 3.2 風土による国民性の違い

王少鋒（2000,p.200）は日・韓・中三国は島、半島、大陸という異なる風土的条件からそれぞれの歴史と文化が生まれ、その風土や歴史や文化の違いが三国の国民性を大きく左右してきた。そして、三国の国民性のそれぞれが集団主義、宗族主義と個人主義であると指摘している<sup>15)</sup>。

島国の日本は四方を海に囲まれ世界から隔てられている。この風土的条件によって、日本は他民族による軍事的な侵略をまぬかれ、他民族による政治的な支配を受けることなく、民族の独立性が守られてきた。そして、日本人は他の多民族国家に比べれば、言語も標準語で統一され人種的にも比較的均質であり、このような風土、歴史などの要素によって、日本人は同類意識と集団帰属意識が非常に強く、日本社会は典型的な集団主義社会を形成している。

朝鮮半島は、一辺は大陸に接し他の三面は海に面していて、島と大陸の連結点となっている。この風土的条件によって、半島は島と大陸との両方から武力による侵略や支配を受けることが絶えなかった。半島社会の韓国は、絶えず異文化、異民族の脅威にさらされてきた。不安定な社会のなかで、信じ合えるのも助け合えるのも、血族しかないという自己防衛の考え方が生まれ、そして儒教を徹底的に実践したことによって、その宗族主義が一層強くなり、社会全体に広がっていった。韓国社会の秩序原理の中核にあるのは家族、同族である。韓国では、人間関係における最大の絆は血縁であり、親や年上に対して、絶対的に服従することによって絶対敬語を使用する。絶対敬語の使用は宗族性タテ社会の特徴である。

大陸の中国では、広大な国土に56の民族が住んでおり、各民族がそれぞれの民族言語を持っており、各自の文化を保有している。地域、民族によって価値観や性格が異なり、そのため、社会構造が非常に複雑である。その背景において中国人は集団や親族ではなく、頼れるのは自分自身だけであるという意識が強く、中国は日本や韓国に比べ個人主義者の特徴が顕著である。個人主義社会において敬語を使用しないのもその特徴である。

### 3.3 敬語と国民性の相互影響

言語は人間の思考と交流の道具であり、文化の媒体であり、一つの民族の言語システムを通じてその民族の特有な考え方、価値観、国民性、社会構造などを透視することができる。言語と文化、言語と国民性は、互いに影響を与え合いながら、変化し続ける関係であると考えられる。敬語の有無と敬語の使用法の違いは、その民族の国民性も反映している。更に敬語の有無と敬語の使用法の違いによって国民性にも影響が与えられるのではないかと考える。

日本語の韓国語と中国語の敬語の使い方と国民性の違いは下記の表3のようなになる。すなわち、集団主義者の日本は相対的に敬語を使い、儒教の価値観を中心に宗族社会の色が濃い韓国では、絶対敬語を使う。個人主義者の中国人は敬語を使用しない。

表3 敬語と国民性

	敬語体系	国民性
日本	相対敬語 (社交型敬語)	集団主義者
韓国	絶対敬語 (家族型敬語)	宗族主義者
中国	なし	個人主義者

日本語において敬語を使うのは内外関係、上下関係、親疎関係、場合の規格によって敬語の規格を決めるのが原則である。集団主義社会においては、属する集団の利益を最も重要視をするため、内外関係を重視する相対敬語を使用する。一方、日本人は相対敬語を身に付けることでより上下関係や内外関係を意識し、認識し、重視するようになる。相対敬語と集団主義者は相互に影響するが、どちらが先かはニワトリと卵の関係のようなものなのではないだろうか。

集団主義社会の日本は相対敬語を使用し、宗族主義社会の韓国では絶対敬語を使用する。相対的な敬語を使う社会は内外の横の関係を重視しているが、絶対敬語を使う社会は上下関係を重視する。

厳密な敬語システムがない中国社会では、より平等な関係を形成し、目上の人や他人に対して直接意見を発表しやすい。

## 4. 敬語のよる対人コミュニケーションの違い

H.G.トリアンディスは個人主義と集団主義の特質について、コミュニケーションの面においては、集団主義者は「私たち」を良く用い、意味を伝えるのにコンテクスト（声の高さ、身振り、姿勢など）に依存する。個人主義者は「私」を使う傾向が強く、内容そのものを強調する。集団主義者には「他者の心を読む」ことが期待される。メッセージは間接的である。個人主義者は関

係性を傷つける危険性があっても心に浮かんだことを直接的に言う。などなど。<sup>16)</sup>

このコミュニケーションの特質から見れば、日本人は典型的な集団主義であり、中国人のコミュニケーションはまさしく個人主義者の特徴を共有していると言えよう。

一方、ヘレン・フィッツジェラルド(2010.p.33)は対人関係において、二つの文化グループに分けられ、集団の調和と対立を避けることに高い価値を置く集団主義の文化に対して自主性とことばによる自己主張に高い価値を置く個人主義の文化があるが、多くの文化に関してそれが当てはまるかどうかは分からないという。<sup>17)</sup>

#### 4.1 日本

日本は世界に公認されている礼儀正しい国で、人々は礼儀正しく、話し方も礼儀正しいが、これは日本に厳しい敬語体系があることと直接関係している。日本語でコミュニケーションする際には、常に相手の年齢や地位を意識し、相手との関係や距離を測らなければならない。

日本語の敬語は社交型敬語ともいわれるように、日本人の敬語行動は社会人になってからに本格的に始まり、小中高の学校教育においては将来、社会生活において敬語を活用できるように指導、教育されるが、生徒同士は勿論敬語を使用せず、教員へも使うことが少なく、筆者は日本の大学で20年間教員として勤めているが、学生に敬語を使われた経験は殆どない。学生たちの多くは上下関係が厳しい部活やアルバイトを始める時に初めて敬語に触れるのではないだろうか。

筆者は「国際コミュニケーション」という担当授業において、日本語コミュニケーションの特質について講じる時に必ず上記の表1の常用動詞「行く、来る、食べる、言う、見る、する」の尊敬語、謙譲語と丁寧語をそれぞれ書かせる小テストを行う。18年間にわたりこの小テストの全問正解率は非常に低い、白紙の答案もしばしばあり、尊敬と謙譲が逆になったり、謙譲と丁寧が混乱したりして、結果的に零点になった学生もいる。小テストをするなら事前に予告しろと抗議する学生もいるほど学生は自分が敬語を使いこなせないことに対するショックは大きいようである。筆者は、日本語の敬語は社交型敬語なので、社会人になってから使いこなすものだから気にしなくて良いと学生を慰めている。

更に、中国語の授業では、「你妈妈」(Your mother)と「我妈妈」(My mother)を日本語に訳す時は「あなたのお母さん」と「私の母」が正しいのであるが、学生はこれを「あなた之母」と「私のお母さん」と訳すことがしばしばある。クラスで問いただしても違和感がないとの回答が多い。自分の母親を家庭では「お母さん」と呼んでいるため「私のお母さん」に違和感がないことは極めて自然であるが、相手の母親を「あなた之母」に違和感を感じないことに日本語の敬語感がまだ浸透していないことが伺える。

家庭教育や偏差値などの要因もあるにせよ、これらの事例から日本人は学生時代ではまだ上下関係・内外関係・利害関係などにとらわれることなく気さくにコミュニケーションをすることが多いことが分かる。本格的な敬語行動は社会に出てから始まるのである。

日本人の対人コミュニケーションでは調和のとれた人間関係を築くために敬語を使用し、お互いに心地よいコミュニケーションを図ろうとするが、敬語を使いすぎると心の距離が遠ざかっていくこともあり、上下、内外、親疎、利害などあらゆる関係を意識しすぎると、素直に率直に意見を述べ難くなり、発信力が弱くなることもあろう。

## 4.2 韓国

儒教の影響が根強く残る韓国では目上や年上を非常に敬う。儒教的価値観による目上・目下の意識は韓国の絶対敬語の使用条件の一つとなっている。絶対敬語社会の韓国では、子供はいくつになっても、どんなに偉くなっても、またどんな場面でも、親に対しては尊敬語を用いなければならない。年上と社会的地位が上である者に対して、絶対的敬語を用いる韓国はまさしくタテ社会である。

韓国語の敬語は家族型敬語とも言われるように敬語行動は家庭の中に始まり、家庭では子供が幼児期から躰の一環として敬語教育を行い、まず祖父母に敬語を使い始めるが、学校に上がって学生同士も同学年でも年上には丁寧語を使い、先生には絶対敬語を用いる。

韓国の敬語行動は主に家庭で行われ、絶対敬語はそもそも家庭内敬語の延伸である。では、なぜ家庭内敬語が社会でもそのまま使えるのか、それは韓国社会の秩序原理の中核にあるのが家族、同族であるためだ。宗族主義社会の韓国では、人間関係における最大の絆は血縁である。この宗族主義が韓国の社会から経済に至るまで強い影響を与えている。エズラ・F・ヴォーゲル氏の『アジア四小龍』によると、「韓国の財閥において家族・同族的経営形態が一般的なのは、この国の財閥が生成したばかりであり、多くがなお創業者の時代にあるという、企業発展段階における「若さ」のゆえであるとみなすことは、もちろん可能である。しかしより重要な要因として、韓国が儒教国家に特有な家族主義もしくは血縁主義の伝統を色濃くもち、企業経営のなかにもこの伝統が拭いがたく生きながらえているという事実を見落とすことはできない。韓国においては、父から子に伝わる血縁の継承原理はきわめて強いのである。

現代、三星、双竜、樂喜などいずれの財閥においても、家族・同族による閉鎖的経営支配は揺るぎなく成立しており、主要傘下企業の最高幹部職に家族・姻戚以外の人間が座るといふ事例はほとんど見られない。」<sup>18)</sup>

上記の四大財閥がすべてファミリー企業であることに加えて、大中小を問わず韓国の企業のほとんどは、ファミリー企業である。創業者が君臨して企業を経営し、家族や一族が協力して会社を運営しているために家庭内敬語をそのまま会社でも使うことになり、この独特な企業文化において、韓国語の敬語は日本語と異なる。

## 4.3 中国

個人主義者の中国人は自分の気持ちをはっきり表現し、YES・NO、好き・嫌いをはっきりという。敬語のないことが中国人にどのような影響を与えているかについて、次のようなことが考えられる。

厳密な敬語システムがない中国社会は、目上・目下という意識が韓国・日本ほどに強くない。集団内部では年齢や先輩・後輩などの関係より、個人の能力が重視され、年齢や地位が異っていても平等な人間関係が形成されている。目上の人や他人に対して直接意見を発表しやすく、反論や異論を呈しやすい。

中国人の対人コミュニケーションは対等な人間関係を志向し、相手との心理的な距離を縮めようとする傾向がある。敬語を使用しないため相手によって表現を変えず形式張ることもない。そして、コミュニケーションの楽しさを重視し、気さくで親しみやすいが、くだけすぎると礼儀に欠けることもある。特に敬語型言語背景の日本人や韓国人とコミュニケーションするときコミュニケーションのギャップを生じ易く、しばしば誤解したり、誤解されたりする。

一方、日本人や韓国人がビジネス中国語を学ぶ時もまず敬語に悩まされ、彼らが敬語に対応していない言葉に遭遇すると、困惑や乱用が生じることを筆者は指摘している。<sup>19)</sup>

## 5. おわりに

日本語・韓国語・中国語における敬語の比較を通して、三国の国民性と対人関係の違いが明らかになった。組織や集団の規制が強い集団社会の日本では相対敬語を用い、宗族社会の韓国では絶対敬語を用い、個人社会の中国では敬語を使用しない。

## 謝辞

本稿は、2018年9月15日中国魯東大学で開催された第1回東アジア日本学国際シンポジウムで「敬語の比較を通して日韓中三国社会の人間関係を読み解く」と題して行った口頭発表を修正、加筆したものである。コメントを頂いた諸先生に謝意を表したい。論文の投稿に際しては、大阪電気通信大学共通教育機構英語教育研究センターの上垣公明教授に詳細なご助言を頂きまして、厚く御礼申し上げます。

## 注記

- 9) 李沢厚『中国の文化心理構造』平凡社(1989)
- 10) 王少鋒「关于重建现代汉语敬语体系的思考」(現代中国語における敬語の再建の構想) 第10回中日対照言語学シンポジウム.中国蘇州大学にて口頭発表(2018年8月18日)
- 11) ルース・ベネディクト著 長谷川松治訳『菊と刀』社会思想研究会出版部(1949)
- 12) 高野陽太郎著『「集団主義」という錯覚—日本人論の思い違いとその由来』新曜社(2008)

## 引用文献

- 1) 王少鋒「日韩商务人士汉语交际中使用敬语的偏误分析及对策The Error Analysis of honorifics by Korean and Japanese Businessperson in Chinese Communication and the corresponding teaching strategies」『全球視野下の商務漢語教學與研究Business Chinese Language Teaching and Research from a Global Perspective』北京大學出版社(2017) p.191
- 2) 辻村敏樹『敬語の用法』角川書店(1991)p.7
- 3) 文化審議会答申『敬語の指針』平成19年2月2日(文化庁：<http://www.bunka.go.jp>)
- 4) 浦谷宏編著・金東奎・吉川香緒子・高木美嘉・宇都宮陽子著『敬語コミュニケーション』朝倉書店(2010)p.8
- 5) 汪国胜, 吴振国, 李宇明, 《汉语词格大全》广西教育出版社(1993)p.279
- 6) 王少鋒著『日・韓・中・三国の比較文化論—その同質性と異質性について』明石書店(2000) p.189
- 7) 席宣, 金春明『文化大革命簡史』中共党史出版社(1996) p.269
- 8) 彭国躍『近代中国語の敬語システム—「陰陽」文化認知モデル』白帝社(2000)p.193
- 13) 王少鋒『日・韓・中・三国の比較文化論—その同質性と異質性について』明石書店(2000)p.200
- 14) H.G. トリアンディス著 神山貴弥・藤原武弘編訳『個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化』北大路書房(2002)p.2
- 15) 王少鋒『日・韓・中・三国の比較文化論—その同質性と異質性について』明石書店(2000)p.200
- 16) H.G. トリアンディス著 神山貴弥・藤原武弘編訳(2002)『個人主義と集団主義—2つのレンズを通して読み解く文化』北大路書房(2002)p.81
- 17) ヘレン・フィッツジェラルド著 村田泰美監訳『文化と会話スタイル』ひつじ書房(2010)p.33
- 18) エズラ・F・ヴォーゲル著 渡辺利夫訳『アジア四小龍』中公新書(1993)p.173
- 19) 王少鋒「日韩商务人士汉语交际中使用敬语的偏误分析及对策The Error Analysis of honorifics by

Korean and Japanese Businessperson in Chinese Communication and the corresponding teaching strategies」『全球視野下的商務漢語教學與研究Business Chinese Language Teaching and Research from a Global Perspective』北京大學出版社(2017) p.192